モガ・淺井カヨさんが、大正・昭和文化に詳しく
コレクターであるアート・ディレクター長澤 均さんに聞く

洋装から建築まで、大正・昭和のモダニズム逍遥

淺井カヨ嬢

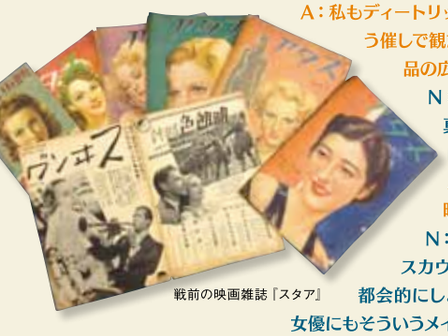
若き日の長澤 均氏

淺井（以下A）：今回の展覧会告知物のデザイン一式を担当なさっている長澤さんが、ファッション雑誌などを中心に戦前のものをいろいろ集めていらっしゃるということで、伺いました。

長澤（以下N）：淺井さんのことはmixiのコミュ“日本モダンガール協會”を主宰されていて存じてました。僕は大正・昭和というか19世紀末から1970年代くらいまでが興味やコレクションの対象で、どちらかというと欧米のもののほうが多いのですが、淺井さんは日本のモダニズムですか？

A：そうですね。大正以降の和洋折衷、あくまで和がベースですが、それを日本風にアレンジして取り入れたところに強く惹かれます。長澤さんは昔から古いものがお好きだったのですか？

N：高校2年、17歳の時にマレーネ・ディートリッヒ主演の映画「モロッコ」('30）を観て、一気に1930年代スタイルへと。1972年のことです。髪を刈り上げ、母の洋裁を見よう見まねで自分で服をデザインして手縫いとミシンで作って着ていました。だから映画とファッションが入り口でした。というか古い映画からファッションを学んだ感じです。これは戦前からあった映画雑誌『スタア』です。戦前のもののほうが面白いですね。広告も全部、書き文字で書体が凝っているし、すごいのは横書きの文字が左からと右からと混在しているところです。読みづらいですが（笑）。



戦前の映画雑誌『スタア』

A：私もディートリッヒやガルボは大好きです。無声映画などもそういう催しで観たりしています。『スタア』を拝見すると当時の化粧品の広告とか素敵ですね。

N：どれも国産メーカーですが、海外の有名女優の写真を版権無視で使いまくってます。映画会社も宣伝になると大目にみていたのかもしれません。

A：やはり柳眉というか極端に細い眉はハリウッド映画から日本のモガまで共通していますね。

N：細い眉はディートリッヒがドイツからハリウッドにスカウトされたとき、パラマウント・スタジオが徹底的に都会的にしようとして生まれたスタイルというか、それ以前の女優にもそういうメイクは施されていましたが、世界的ブームはディートリッヒ以降ですよね。日本女性にもずいぶん影響を与えましたから。

A：日本の当時の雑誌を見ると細い眉は洋装で、ふつうの眉は和装で、なんて書いてありました。

N：淺井さんの“洋装”はどういうところで入手しているんですか？

A：骨董市や古着の業者さんなどいろいろです。基本的に日本のもので、当時のものを探して着ています。今は浅草の〈東京蚤堂〉などによく行きますし、そこで知り合った同好の方もたくさんおります。

N：浅草は1980年代に雑誌のレトロもの企画などで何回かロケ撮影しました。もともと浅草六区が好きで学生の頃から六区を散策して映画館に入り、〈アリゾナ〉で食事を摂って、最後は〈神谷バー〉で電氣ブランを飲んでシメ、なんてことをしていましたから。80年代前半までは、六区の古い建物がまだけっこう残っていましたが、撮影の翌日には解体が始まったりとか、今はほとんど残っていませんものね。仁丹塔をバックにモデル撮影したりもしました。

雑誌『APRES』の浅草特集+
『BRUTUS』特集「東京デートコース」

A：〈アリゾナ〉は私もよく行きます。私も幼少のときに愛知県の〈明治村〉や岐阜県の〈日本大正村〉などで当時の建築を知り、衝撃を受けたので古い建築を観てまわるのは大好きです。

N：80年代前半は浅草から隅田川を渡って戦前の“赤線地帯”として知られる玉の井に行くと、東京大空襲で焼かれなかった大正・昭和の民家や娼館がまだ残っていました。永井荷風の『濹東綺譚』の舞台になったところですが、バブル期前までは、まだ往時の片鱗は窺えたんです。

A：東京駅の改装によって集客が上がったり、最近は古い建築への関心も高まっていると思いますが。

“モガ”淺井カヨ嬢からの「蓄音器の宵」へのお誘い

ご機嫌よろしゅうございます。このたび八王子市夢美術館での催事「蓄音器の宵」にて、“レコード・ガール”を務めます、淺井カヨと申します。

当日使用の卓上蓄音器は、手廻しで電気を一切使わない昭和初期の機種で、当時のSPレコードをお掛けいたします。片面を掛けるたびに、毎回、鉄針を交換してハンドルを廻します。ものの数分で1曲が終わってしまいますが、丁寧に手間を掛けて聴くことに蓄音器の醍醐味があると感じて居ります。現在ではオンライン上で曲をダウンロードして、簡単に音源を購入出来る時代となりましたが、あえてこの古（いにしえ）のSPレコードを聴くことに、当時をリアルタイムでは知らない私が“懐かしきもの”ではなく“新しきもの”として、いつしか夢中になってしまいました。当時の音源を求めて、骨董市や古道具屋、レコード専門店などで、少しずつSPレコードを集めました。最初は、個人で鑑賞を楽しんで居りましたが、好きが高じて西荻窪の飲食店にて、蓄音器の催事を昨年迄に全１０回開催いたしました。手廻しの蓄音器で初めてSPレコードを聴いた方が多く、その魅力にとりつかれる方が続々と誕生されました。今回の催事では、特別展に合わせました大正・昭和の唱歌や流行歌などの選りすぐりの美しい音楽をお楽しみ頂きます。また、当時の衣装に身を包んだ“レコード・ガール”がお聴かせいたします。

SPレコードが懐かしいと感じるご年配の方々からは、ぜひ当時のお話を聞かせて頂きたく存じます。当時を知らない世代の方々には、大正、昭和の文化を生で体感することによって、興味を持って頂くことを願ってやみません。私は“モダンガール”とその時代を常日頃から追いかけて居りまして、一職業婦人として生涯をかけて大正・昭和初期の古き良き文化を研究、実践、発信していくことに命を削る覚悟で邁進する次第です。これまでに、大正・昭和初期に関する催事への出演、企画などを積極的に行って参りました。大正ロマン・昭和モダンの溢れる会場にて、皆様とお目にかかれますことを心より楽しみにいたして居ります。

N：日本は高度成長期から70年代までに古い建築を壊し尽くしたと思うんです。僕は大学の卒論で「大正・昭和期の欧米建築の移入」みたいなことを調べて、当時、東京周辺にあった古い洋館や住宅、戦前の近代建築などをずいぶん見て回っていたのですが、行くさきから壊されてゆく感じでした。80年代後半にやっと保存意識も高まったけれど、バブル経済でまた多くが壊されました。辰野金吾設計の東京駅のような重要な建築は改装して集客して、となってもやはり壊されるもののほうが多いですね。“赤煉瓦”ならまだしも戦前のコンクリート製のモダン建築は保存されないです。あと神田の裏通りや下町に現存する“看板建築”は、大正・昭和の庶民の店屋を窺える貴重な資料と思いますが、どんどん建て替えられています。

1920年代のアール・デコ・デザインの『Vogue』誌。
三越大阪支店衣装部による合本

1910年代から20年代の『ガゼット・デュ・ボン・トン』完本と
ファッション・プレート

A：埼玉県川越市は“大正浪漫通り”など、古い建物をうまく活用していますね。

N：僕は実家が隣町だったのでよく知ってますが、たんに「古い建物」みたいな感じで、すでに傷んでいる家や蔵（くら）もたくさんありました。70年代の懐古趣味的傾向以降、見直されるようになって蔵も補修され、いまは通りもきれいに整備されてますね。

A：私が生まれた70年代半ば頃は、アール・デコなどが再ブームになったようですが。

N：そうですね。'75年に雑誌の『美術手帖』が組んだアール・ヌーヴォー特集が、日本でのその後のアール・ヌーヴォー、アール・デコ再評価の起爆材になった感じです。欧米では60年代からですが、一般に人気が出たのはやはり70年代に入ってからでした。欧米の映画でやたらと戦前を時代背景にしたクラシカルな映画がつくられたのが'73年くらいからです。

A：80年代のレトロ・ブームの話がありましたが、それはずっと続いたということですか。

N：いや、ちょっと途切れている感じです。70年代前半の懐古趣味は後半にはただのシックな雰囲気好きみたいな気分に移って大人の趣味みたいな感じになって。80年代はまた若者がニューウェイヴ・カルチャーとともに古いスタイルや美術様式なんかを評価し始めたって感じでした。

A：雑誌『an an』でも「モボ・モガの時代」という別冊がありましたね。

N：『an an』は、そういうところに敏感で'68年に映画「俺たちに明日はない」が公開され世界的にヒットして30年代スタイルの懐古が始まると、映画の原題を取って「ボニー&クライド・ルック」なんて特集を70年代初めには組んでました。

1922年発売のキャロンの香水「nuit de noel」。
印籠風ケースに当時のオリエント趣味が窺える

A：レトロな映画として「華麗なるギャツツビー」（'74）が話題になったのはそのあとですね。

N：あの作品はアカデミー衣裳賞を取りましたが、衣裳考証は今ひとつでした。20年代と30年代スタイルがごちゃごちゃで髪型も違います。

A：あれは私もちょっと違うなあ、って感じました。

N：男優が髪を刈り上げてなかったり、女優がウェイヴヘアやボブでなく、ロングのストレートだったりするとやはり雰囲気出ませんね。

A：私もサイレント期の映画などで男優の方がもみ上げとかきれいに刈っているのが好きです。

N：それルドルフ・ヴァレンチノとかですか（笑）。70年代後半からですね、ハリウッド映画の衣裳考証がどんどん厳密になってノスタルジックな映画ばかりヒットするようになったのは。ツィッギーが主演したケン・ラッセル監督の「ボーイフレンド」（'71）が、1920年代のアール・デコ様式をファッションから舞台まで、ものすごくよく再現していて、いま観ても勉強になります。

A：長澤さんは戦前の香水からファッション雑誌まで多数、コレクションなさっているようですが、なにか基準はあるのですか？

N：香水は50年代までのもの、グラスはバカラ製、香水自体残っているもの、できれば未開封、とハードルを高くしているので大変です（笑）。香りではなく、古いモード誌での香水の広告でデザインに惹かれました。雑誌はレトロ好きとファッション好きが相俟って『Vogue』、『Harper's Bazaar』などの1920年代のものから収集しています。日本で戦前に刊行されていた『スタイル』なんかもモダンで大好きです。その後、ポショワールという日本の浮世絵に近い印刷技法を駆使した高級モード誌『ガゼット・デュ・ボン・トン』のファッション・プレートを集めるようになります。イラストがきれいで印刷も版画同様なので網点がなくてすごく発色が良いです。

A：（ルーペで覗いて）きれいですね！

N：そこから『ボン・トン』以外のポショワール印刷の高級モード誌などにも手を広げていった感じです。ちょうど日本の大正・昭和初期にあたるもので、アール・デコ的なスタイルは日本のモダニズムにも影響を与えています。最近、とても珍しいものを入手したのですが、昭和初頭に大阪の三越の衣装部が定期購読し、部内で合本した『Vogue』誌がまとまって市場に出たんです。手作りの合本でひとつひとつ違う装幀を施しているところに当時の欧米ファッション誌の貴重さを感じました。欧米でもブルジョワ層しか購入できない高級誌を日本のデパートがわざわざ船便で定期購読して、たぶん“洋装”の参考にしていたのでしょうね。

A：『Vogue』などを購読できたのはモダンガールでも一握りの人たちと聞いております。

N：淺井さんは“シマウマ水着”など、かなり貴重なものをお持ちですよね。

A：洋装のなかでもレジャーものは、あまり保存されてなくて貴重です。誰か半袖のものをお持ちでしたらご連絡ください（笑）。

N：“レジャー”という概念自体、歴史家アラン・コルバンの研究にあるように1900年前後に成立したものですから……残っていないという点では、これはどうですか？　戦前の日本の絹のストッキングの未使用品です。ラベルに洗濯方法などが書かれていますが、なぜか浮世絵のイラストが。

戦前のシルクのストッキング未使用品

A：これは貴重ですね！　でも、なぜ男性の方がストッキングなどを（笑）？

N：フェティシズムなのか、懐古趣味なのか？　でも、シームが入ったフルファッションド・ストッキングが一番セクシーだと思うのです。

A：大正・昭和はほんとうに奥深いですね。いろいろお見せいただき勉強にもなりましたし、なによりも目の保養になりました。見て楽しいというのが一番です。

N：こちらこそいろいろ見ていただいて楽しかったです。

1984年創刊の雑誌『月光』、表紙イラストは高畠華宵（弥生美術館からの貸し出し）、AD長澤 均

長澤 均　Hitoshi Nagasawa

アート・ディレクター、ファッション史家。昭和31年生まれ。武蔵野美術大学卒。1981年に自身で創刊した雑誌『papier colle』（特集＝ナチズム）が話題となり、誌上で展開したレトロ・ファッションをきっかけにその後、『BRUTUS』などの雑誌で1910年代から1950年代までのファッションを再現するような企画を手がけ、1980年代のレトロ・ブームの先端を担う。グラフィック・デザイナーとして1984年から雑誌『月光』にて、高畠華宵のイラストを表紙に用いるシリーズを展開。CASIOのリスト・ウォッチ「データバンク」シリーズのネーミング、デザインを継続的に手がけ、2013年春にもオリジナル・デザイン・ウォッチが発売予定。美術展では川崎市市民ミュージアム「バウハウス」展ほか数々の展覧会デザインを担当している。2000年には著書『パスト・フューチュラマ～20世紀モダーン・エイジの欲望とかたち』（フィルム・アート社）の刊行を機にニューヨークの〈ジャパン・ソサエティ〉の招聘で日本のデザイン・カルチャーについて講演。2006年に英国の50～70年代ストリート・ファッション・カルチャー史『BIBA スウィンギン・ロンドン1965-1974』（ブルース・インターアクションズ）を刊行。2008年には編集・デザインをした世界の先端的ロゴ・デザイン集『LOGO MONDO』（グラフィック社）が国内だけでなく米国・欧州・中国などで翻訳発売される。2009年には20代から集めてきた昭和の人工着色絵はがきを集大成した『昭和30年代モダン観光旅行』（講談社）を刊行、朝日新聞の書評欄ほか多くのメディアで取り上げられる。19世紀末から1970年代までの欧米のファッション雑誌、とくに1910～20年代のポショワール印刷の高級モード誌をコレクションしている。

※本文章（この面）に掲載したコレクションは、すべて長澤氏個人の所蔵品です。